

岡山醫學會彙報

岡山醫學會通常會

同會は本月二十日午後三時十分より岡山醫科大學附屬醫院臨牀講義室に於て開會す田村主幹開會を報じ直ちに左の演説に移る

第一席 大網乳斑の組織的知見

病理學教室 濱崎 幸雄君

演者は家兔大網に於ける乳斑の分布竝に乳斑の組織學的構造の概要を述べ特に乳斑を覆ふ漿膜細胞に就て詳述せり。之を總括するに

1, 乳斑を覆ふ漿膜細胞は大網に於ける他の部の漿膜細胞に比して遙かに小さくその形甚だ不規則なり。従て此の部の黏合線は甚だ複雑にしてその太さ一定せず。特に注意すべきは乳斑を覆ふ漿膜細胞間には多數の類圓形の細胞間隙を認め得ること及び此等の漿膜細胞間には稍々多數の上皮様の細胞が介在することなり。

2, 上記の類圓形の細胞間隙(以下之を簡単に小乳と記す)は成熟家兔の大網乳斑に於ては常に存在するも生後約一週間以内の家兔乳斑に於ては之を認め得ず。従て從來人工的産物なりと見做されたる、場所を定めず又時を定めず現はるる所謂 Stomata とは類を異にするものなり。尙ほ演者は人工的産物を確實に除外せんがため生體鍍銀法、超生體鍍銀法及び演者自からの考案にかかる「クロール」銀染色法の三様の鍍銀染色標本に就て觀察し孰れもほぼ同様の成績を得たり。

尙ほ「カルミン」浮游液及び墨汁を腹腔内に注入し吸収試験を行ひし結果此の小孔は大網淋巴管と直接交通することなきを確認せり、即ち本小孔は v. Recklinghausen によりて唱へられたる嚴格なる意義に於ける Stomata に屬せず。

3, 上記の上皮様細胞はその染色性竝に形狀に於て Histiocyten に酷似す。演者はその本態を究めんがため「リチオンカルミン」を靜脈内、又は腹腔内に注射し生體染色を行ひ、該上皮様細胞の明に Histiocyten なることを確定せり。

4, 小孔と上皮様細胞との關係。鍍銀標本に就て觀察するに比較的大なる小

孔の深部に於て往々 Histiocytin の核に類似するものを検出し得べく、又生體染色に鍍銀法を兼ね行へる伸展標本に於てはかかる小孔中に色素顆粒を現すものあり、更に「カルミン」顆粒の嗜食試験を行ふに伸展標本に於ては小孔は多數の色素顆粒をあらはす。然るに之を連続切片となして觀察するに、開放せる小孔にして遊離の状態にある「カルミン」顆粒を有するが如きものは見受られずして、漿膜細胞の間隙中には「カルミン」顆粒を飽食せる Histiocytin の原形質突起を見る。尙ほ又腹膜に輕き刺戟を與へたる材料に就て檢するに上皮様の細胞は増加し小孔の直徑は一般に増大しその内に易く上記せるが如き核を發見し得、その切片に就て檢するに多くの Histiocytin は表在性となり増大せる漿膜細胞の間隙中にその原形質の一端を現すを見る。

以上の所見より乳斑の伸展標本に於て見らるる小孔及び上皮様の細胞は、共に Histiocytin が遊走の途中漿膜細胞間を通過する際に現るる像なり。換言すれば Histiocytin の核は尙ほ深部に位しその原形質の一端のみが漿膜細胞間に位するものは小孔となりて現れ、Histiocytin の核が漿膜細胞の核とほぼ同じ高さに位するに至らば上皮様の細胞となつてあらはるものなり。

尙ほ諸種動物に於ける乳斑の比較研究及び實驗的腹膜炎に於ける乳斑に特異なる病理學的變化に關しては今尙ほ研究中に屬す。(自抄)

第二席 ニッスル小體の新染色法に就いて

解剖學教室 尾 藤 太 君

「フォルマリン」にて固定せる神經組織切片を「カルボール、チオニン」にて染色し、而して之を「モリブデン」酸「アンモニウム」或は吐酒石、「タンニン」酸にて固定することにより、從來のニッスル小體染色法を凌駕することを得たり(詳細は追つて本誌に掲載す可し)

第三席 各部位に於ける血管に關する研究 (第二回報告)

生理學教室 西 丸 和 義 君

本論文は追て本誌に掲載すへし

右終りて午後五時閉會す。